

江古田小校長室便り 「温故創新」

H29 (2017)・1221 NO62

校長 伊波喜一

ICANの 受賞嬉しや 廃絶に 向けた歩みぞ 尊き一步

ノルウェーのオスロで10日、ノーベル平和賞の受賞講演式がありました。国際NGO「核廃絶国際キャンペーン」(ICAN)の運動をリードした被爆者のサーロー節子氏(85歳)の切々たる訴えは、聞くものの心を揺すぶりました。「私たち被爆者は、こうした苦しみ、そしてまた生き残るため、灰の中から自らの人生を立て直すための険しい闘いを通して、世界に終わりをもたらず核兵器について警告しなければならないと確信しました。核兵器の開発は、国家の偉大さの高揚などではなく、国家が暗黒の淵へ墮落することを表しています。核兵器は必要悪ではなく、絶対悪なのです」。

日本は世界で唯一の原爆被爆国です。核兵器による被害は体の細胞を破壊するにとどまらず、何世代にもわたり被爆者とその家族を苦しめています。家族だけではありません。 本年、核兵器禁止条約が出来ましたが、今、世界が保有する核兵器の量は、広島の数ではありません。核の使用を正当化することは、許されません。負の連鎖を断ち切ろうというサーロー氏の決意に、襟を正しました。